

日本の神聖な観光スポット —二つの著名な神社とその地方観光政策の比較—

ポッケンドルフ ローレンツ

このところ日本へのインバウンド観光は増加し続けている。様々な旅の目的地のなかでも、文化遺産は大きな役割を担っている。しかし、神社仏閣への団体ツアーは望ましいことだろうか？ ここに来たという証明のために祈祷所の前で写真を撮れば十分なのだろうか？

神社がもつ意味と、神社が観光地として持つポテンシャルを、地方観光政策の一部として明らかにするためにケーススタディを行なった。ケーススタディの対象には、参詣地として長い歴史をもつ著名な二つの神社、三重県の伊勢神宮と、和歌山県熊野にある熊野那智大社を選んだ。両神社の神職と各地域の行政における観光担当者とのインタビューによって、田園地帯にある二つの宗教的なスポットの観光が抱える現在の問題について重要な洞察が得られた。

調査の結果、両神社にとって、森と水に囲まれた清らかな自然的環境のなかに位置しているということが、宗教的に重要であることが明らかになった。地方の観光政策について見ると、熊野の田辺市は、観光客を、熊野古道地域における持続可能なスピリチュアルな観光に惹きつけるための戦略とその実行手段を有している。アジアの観光客とヨーロッパの観光客の旅のし方には違いがあるが、全体として、これまでとは異なる旅行スタイルに向かう傾向が見られる。つまり、神聖な場所を訪れるだけでなく、その場所の特別さを経験し、自己の内面がその特別さに触れられるということである。こうした社会的な傾向を予見し、将来的な戦略に役立てるには、観光とライフスタイルの融合についてのさらなる研究調査が必要である。

keywords : 文化遺産観光、神社、宗教的な意味、観光政策、将来的な戦略

目 次

はじめに

1. 研究方法とケーススタディ
 - 1.1 問題設定と研究目的
 - 1.2 ケーススタディ
 - 1.3 研究方法
2. 成果
 - 2.1 ケーススタディ分析
 - 2.2 考察

はじめに

このところ日本は、2003年以来政府が推進している観光においてブームに沸いている。2015年には訪日観光客数は2000万人を記録し、2020年の東京オリンピックまでには4000万人に達すると言われて¹⁾。とりわけ外国からの観光客は、日本の文化を知り、消費し、経済を活性化してゆくだらう。こうした文化と観光ツアーの重要な要素になるのが、古い神社仏閣である。

しかし、団体ツアーによる観光で神社仏閣にますます多くの観光客が訪れることは、本当に望ましいことだろうか。ショッピングセンターにとって意味のあることが、文化遺産観光にとっても意味があるとは必ずしも限らない。外国人観光客とそれぞれの土地の文化遺産を相互に意味のある関係にするためには、何が重要だろうか？ この問いは、さらに次のような問いにつながってゆく。神社を神聖なものとしているのはどんな特徴で、観光客にそれぞれの土地についての感情をもたらすのは何なのか？ 神道の神社はどのように保護されているのか？ 神道の神社はどんなポテンシャルを潜在的に持っているのか？ 本論文の背景をなしているのは、こうした問いである。本論考では、仏教の寺院については扱わず、神道の神社を対象を絞って論じることとする。

本論文は、神社の本質的な意味を考察し、そこ

から、文化遺産観光が有する貴重な価値を導き出すことを目的とする。さらに、それぞれの建造物の周辺環境や魅力に影響を与えているのは何かを、さまざまな空間保全状況の点から明らかにする。

このテーマについての専門的な先行研究はわずかしかないが、例えばライジとグリフィンス(2015)は、世界の巡礼観光と神聖な場所を訪れる観光客の動機について、示唆に富む洞察を示している⁽²⁾。しかし、このテーマを日本というコンテキストのなかで理解するためには、まずは日本の神聖な場所そのものについて理解を深めなければならぬ。そうした場所への訪問者が増加していることを考えると、日本の神聖な場所についての理解を促す研究が早急に提供されるべきだろう。

1. 研究方法とケーススタディ

1.1 問題設定と研究目的

本論文ではまず、以下の点の解明を目指す。

(a) 周辺環境や保全状況との関係を含む、神道の神社がもつ空間的・精神的な関連

(b) 神道の神職が、神社の訪問者の一部である観光客に対して持っている見解

(c) 地域行政や地域団体の観光部門が神社という文化遺産観光に対して持っている見解

(a)：たいいていの外国人観光客は、文化遺産となっている宗教的な場所を訪れる際に、事前にわずかな情報しか得ていない。若い世代の日本人観光客も、みずからの(宗教的な)伝統をあまりよく知らないことが多い。そのため、ここで問われるのは、そもそも神社を神社たらしめているものは何なのか、という問題であり、これは本論文の根本的な部分をなすものとなる。

(b)：神職の見解は(a)の問題に答えるためにも、観光客による訪問のあり方や、現地における訪問者の現在の傾向と関心を理解するためにも、非常に重要である。

(c)：観光戦略を進展させ、各市町村で観光サービスを提供する場合は、地方公共団体が主導的役割を担う。そのため、観光部門の担当者とし、適切な情報を得ることは非常に重要である。

1.2 ケーススタディ

上記の三点について二つのケーススタディをもとに調査を行う。ケーススタディの対象は下記の基準に従って決定した。

1. 際立った風致的景観に位置していること
2. 著名な神社であること(長い歴史をもつ)
3. 現代でも宗教活動を行っていること

この三つの選択基準を以下に簡単に説明する。

(1) 重要な意味をもつ神聖な建造物は、しかるべき場所に位置している。このことは、とりわけ日本の古い神社仏閣にも当てはまる。原則として、景観的な位置と宗教的な目的とのあいだには関連があると言える⁽³⁾⁽⁴⁾。

(2) 位置や建造物の質と並んで、歴史があるということは、通例、ある場所の知名度と人気の前提条件となっている。長い歴史があつてこそ、神社や寺院は観光的に見て魅力的な訪問地となる。

(3) 屋外ミュージアムはたしかに固有の存在意義を持つてはいるが、本研究にとっては、現在も活動中の宗教的生活が、神社が本当に神社と呼ばれうるために欠かせない要素となる。

以上に挙げた基準と合致するケーススタディとして、以下のものを選んだ。

第一のケーススタディの場所は、三重県南部にある伊勢神宮である。伊勢神宮は中世以来、多くの日本人にとって有名な参拝地であり、観光地でもある⁽⁵⁾。2016年5月の伊勢志摩G7サミットをきっかけに、国際メディアが伊勢神宮について初めて詳細な報道をしたことにより、伊勢神宮は海外でも有名になり、それ以来外国人観光客を惹きつけている。

第二のケーススタディの場所は、和歌山県南部に位置する熊野那智大社である。この神社は熊野三山の一部であり、2004年に世界遺産に登録された⁽⁶⁾。熊野那智大社は、伊勢神宮と同じく著名な参拝地であり観光地である。参詣道によって数々の神社が山間地の寺院と結びつけられており、ここでは神道が、古来の自然崇拜の伝統に根差した状態で、中国と韓国から伝わった仏教や神秘的な山岳苦行者たち「修験道」と融合していることが確認できる⁽⁷⁾。(図1参照)



図1:ケーススタディを行う場所^⑧

1.3 研究方法

情報を直接的なリソースから得るために、以下の方法でデータを収集する。

1. 現地調査（観察）
2. あらかじめ準備した質問事項を含む専門家へのインタビュー（日本語）

両社の運営に関わる人々や地域の観光部門の責任者とのインタビューを通じて、価値のある独自の研究データを得ることができた。（表1参照）

No.	場所	氏名／所属機関（職位）／インタビューの実施年月日（インタビュー時間）
1	伊勢(伊勢市)	音羽悟氏／伊勢神宮神宮司庁広報課（課長）／2017年3月21日（1時間14分22秒）
2		中村洋氏、谷智恵氏／伊勢市観光振興課／2017年3月21日（1時間13分4秒）
3		西村純一氏／伊勢市観光協会／2017年9月11日（34分23秒）
4	熊野三山（那智勝浦町、田辺市）	伊藤士騎氏／熊野那智大社（禰宜）／2018年8月21日（41分47秒）
5		小川雅則氏／田辺市熊野ツーリズムビューロー（事務局長）／2018年8月20日（1時間7分46秒）
6		土佐京平氏／那智勝浦町観光企画課観光係（主任）／2018年8月24日（29分54秒）

表1:インタビュー対象者(ケーススタディ)

紙面の都合上、インタビューの質問を完全な形で掲載することはできないが、最も重要な質問は以下の表2に要約して記す。

すべてのインタビューはデジタル録音され、下記の通りに評価・活用された。

- a) 上記の最も重要な質問についての回答の聞き取り、記録
- b) 個々の事例とグループごとの比較：インタビューの総括報告

No.	テーマと質問
1	神社の意味と位置について なぜ、一般的に神社は神聖な場所であるのか、その理由について、お考えをお聞かせください。またとくに貴社が神聖な場所である理由も、教えてください。その際に、景観的な位置という観点からもご意見を伺いたく思います。
2	観光客の行動について 伊勢神宮や熊野那智大社を訪れる人々のなかには、信仰の篤い人もいますが、そうではない人は、ただ飲食したり、写真を撮ったりするためだけに訪問しています。貴社の参拝者を観光客として見た場合、どんな行動が目につきますか？
3	土地の理解を促進するための方法について 観光客に当地をより深く理解し、感じてもらうために、何か特別なガイドやワークショップを行うことは考えていらっしゃいますか？
4	観光計画と将来的な戦略について 皆さんの地域（伊勢市、田辺市、勝浦町）でのこれまでと今後の観光計画および観光についてのビジョンをお聞かせください。

表2:インタビューの質問(ケーススタディ)

さらに、現地でのインタビューと調査をもとに、ケーススタディで取り上げた神社の景観の問題に注目し、最後に比較分析、議論、結論を記す。

2. 成果

2.1 ケーススタディ分析

2.1.1 神社の意味と位置

a) 伊勢神宮（インタビュー1、音羽氏）

一般的に：以前は、人々は平地を耕作地や居住地として使えるようにしてきた。高地に位置する平地は使われないままだった。これを人間の顔に例えると、「頬」は農業に使われたが、「額と鼻」はそうではなかった、ということである。神社はそうした高い場所に建てられていた（1分30秒）。しかも、たいていの神社は清らかな川や小川に沿って建てられた。神社の境内を流れる清らかな水は周辺の稲作に使われた。鎮守の森の意味はこの点にもある。

伊勢：日本の神話と年代記である『日本書紀』では、太陽の女神（天照大御神）が伊勢を、その美しさのため「うまし国」として、自分を崇拝するための場所に望んだということが書かれている。この関連で音羽氏は、清らかな五十鈴川と神社をとりまく豊かな緑の山と森があるという事実を挙げています（3分30秒）。神社の立地の選択として音羽氏は、皇室の戦略的な目的にも言及している。

この地方の氏族に大和族に対する忠誠を誓わせ、皇室の神（天照）を崇拜させるために、最新の稲作技術を伝えるということが、この戦略の一部だった。しかしこのときも、土着の風習と神々（神）は引き続き尊敬され続け、伊勢でも崇拜された。こうした日本人の宗教的な寛容さを音羽氏は素晴らしいと考えている（8分45秒）。さらに彼は、近傍の伊勢湾にも言及している。伊勢湾は魚介を得るための入口だっただけでなく、当時まだ大和皇室の支配下に入っていなかった東方地域（東国）へ出かけるための出口でもあった。つまり、伊勢においては、宗教的な理由と自然空間的な理由と政治戦略的な理由が合わさって、神社の位置を決定したということが言える。

b) 熊野那智大社（インタビュー4、伊藤氏）

一般的に：神社は洪水から逃れるために、つねに少し高い土地に建てられたが、言葉にし難い何かや神聖なものを感じられ、目には見えないにもかかわらず「神」の存在を日本人がつねに感じてきた清らかな場所にも建てられている（2分30秒）。熊野三山と那智大社：熊野地方は昔から「神々の土地」として有名だった。およそ2,600年前に伝説上の最初の日本の天皇である「神武天皇」が船で熊野にやってきて、きらめく那智の滝を発見し、彼はこの滝にすっかり心を奪われた。伊藤氏によると、このことが、那智の滝を「大名鞭の神」の「ご神体」として崇拜し、滝壺の近くにある広尾神社を崇拜する根拠になっている。那智の滝を竜の滝として崇拜することも同じく有名だが、これは民間信仰の一部であり、神社の公式な伝統ではない。

さらに、熊野地方は神道と仏教の融合でも有名である。残念ながら、現在でも仏教の青岸渡寺との一体性を形成している熊野那智大社を除いては、明治時代に、何百年もかけて形成された神道と仏教の融合が、法律によって全国で暴力的に分断されてしまった。そのため、他の二つの熊野三山の神社（熊野本宮大社と熊野速玉大社）の敷地内にある寺院は破壊された。紀伊山地の森におおわれた景色は、全体として、仏陀の「清らかな場所」と見なされた。また、仏教は知的能力や精神的な力ももたらした。山岳修行者の特殊な訓練で

ある「山岳修行」は、「修験道」の一部として、熊野地方の第三の宗教的な観点をなしている（9分2秒）。那智山周辺の山岳風景は、神聖な曼陀羅の物質的な顕現とも見なされていた（13分10秒～）⁹⁾。

伊藤氏によると、神道には大きな二つの神々のグループがある。第一は、縄文時代に由来する「神」で、自然崇拜とアニミズムにさかのぼるものである。第二は、弥生時代に由来する「神」で、これは耕作や稲作や豊作と結びついている（18分20秒～）。したがって、伊勢が弥生時代の神々を崇拜しているのに対して（稲作）、熊野三山は縄文時代の神々を崇拜していると言える（自然崇拜）。

つまり、那智においては自然という神聖なもの（滝）が始まりにあったため、神社の立地選択にとって、宗教的かつ自然空間的な根拠が神社の立地にとって決定的だったと言える。

2.1.2 観光客の訪問時の行動

a) 伊勢神宮と伊勢市（インタビュー1～3）

音羽氏によると、歴史的に、伊勢神宮にはすでに奈良時代（710 - 794）から参拝者が訪れていた。しかしこの時代には、天皇の勅使しか神社で祈りを捧げることはできなかった。

鎌倉時代（1185 - 1333）以降、奈良と京都の大寺院から高位の僧侶たちが訪れるようになり、彼らはとても歓迎された。このことは、よく言われているのとは違って、伊勢神宮が仏教を拒否していなかったことを示している。だが、彼らは山岳修行を好ましいとはまったく思っていなかった（インタビュー1、23分5秒）。僧侶たちの参詣は、一般庶民が伊勢参りをするための地ならしをした（24分40秒）。

室町時代（1336 - 1573）には、五十鈴川に宇治橋が架けられたことにより、神社へのアクセスが容易になった。これ以降参拝者は、今日と同様、おはらい町通りを通るルートを使うようになった。

江戸時代（1603 - 1867）にはついに一般民衆が大挙して押し寄せるようになり、まもなく周辺環境に負担がかかるようになった。より多くの建設木材と薪が必要になり、神社の近くでも伐採が行われるようになった。

明治時代（1868 - 1912）には、宇治橋から見

える神路山がすでにほとんどはげ山になっていた。その結果、1922年（大正11年）には類を見ない洪水に見舞われた。裸になった地面は豪雨による過剰な水を吸収できなかったのである。鑑定調査の結果、東京帝国大学の本多静六博士（1866 - 1952）と皇室林野局の川瀬善太郎博士（1862 - 1932）の監督のもと、植林が行われることになり、この植林は今日に至るまで効果を及ぼしている。

今日では、参拝者は年始だけではなく、一年を通してやってくる。音羽氏によると、参拝の動機も変わってきており、神社はますます癒しの空間と心の拠り所になってきている（45分40秒）。若い人たちは神に祈るだけではなく、神木に触れたりもしている（祈らない場合でも）。

さらに、若い人たちは再び徒歩で参拝するようになってきている。このことは、神社と町の歴史地区（おかげ横丁）の商店街、つまり現地の経済にとっては有利である（49分20秒）。1970年代や1980年代には見られなかったことだ。当時、おほらい町商店街はまだ再整備されておらず、それに隣接する歴史地区の「おかげ横丁」もまだ造られていなかった。モータリゼーションのおかげで、とくにバスで宇治橋まで直接乗り付けられるようになったため、アクセスが容易になった。

町の行政サイド（インタビュー2、西村氏と谷氏）はこれに関連して、ここ数年のおかげ横丁の訪問者数の多さに言及している（2014年は580万人）。行政によると、一般的に参拝者に悪い態度は見られない。例えばおほらい町商店街にゴミ箱は設置されていないが、ゴミはほとんど見当たらない。日本人は環境問題に意識的になり、ゴミを最寄りのゴミ箱まで持っていく（22分1秒）。

行政はしかし、すべての外国人訪問客が神宮の神社の境内の規則を理解できるわけではないということも指摘している（2.1.3参照）。

b) 熊野那智大社と熊野三山地区（インタビュー4～6）

熊野那智大社の伊藤氏は、以前はとりわけアジアからの訪問者に、例えばゴミやたばこの吸い殻を地面に捨てるといったような、よくない振舞いがしばしば見られた、と述べている。しかし、全

体として五年前頃から行動は劇的に改善されてきている（インタビュー4、27分14秒）。

田辺市熊野ツーリズムビューローの小川氏は、以前は観光客の行動に問題があったと説明している。熊野三山地域が2004年に世界遺産になって以降すぐに、大きな旅行バスが東京や大阪から乗り付け、この地域に団体で観光客を連れてきた（インタビュー5、3分24秒）。そのなかには例えば、ハイヒールやスカート姿の女性のような、すでに服装からして山を歩く準備をまったくしていない人々もいた。ときには、山道が損傷を受けたり、木の枝が折られることもあった。こうした事態が特に、田辺市による新しい観光プランニングの作成につながっていった（2.1.4参照）。

しかしその間に、状況は目に見えて改善された（28分40秒）。西洋からの現在の観光客は、本当に山を歩くために熊野にやって来る。熊野川でのボートも人気がある。

以前はこの地域でもゴミが捨てられていたが、今日ではほとんどそうした事例は見られない。とはいうものの、最近では新しい問題が生じている。秋のようなハイシーズンは特に、宿泊所が不足するのである。このため、事前に宿泊を予約しなかった徒歩旅行者のなかには、指定された場所以外でキャンプをする者もいるが、田辺市はこれを好ましく思っていない（33分0秒）。

那智勝浦町の観光企画課観光係の土佐氏は（インタビュー6）アジアの観光客と西洋の観光客に異なる行動パターンがあることを観察している。特に日本の観光客は名古屋や大阪からバスで来て早朝に到着し、まず那智大社と滝を見学し、その後食事に行き、すでに午後にはホテルにチェックインする。こうした人々は町そのものはあまりよく観光していないようだ。これに対して、西洋の観光客はみずから積極的に行動し、徒歩でこの地区を回るようである（7分20秒）。全体的に観光客の態度はよく、トイレもきちんと使われている。

以上をまとめると、アジアの観光客と西洋の観光客の行動には文化的な違いがあるが、今日では全体的に見て、以前よりもよい態度になってきているということが確認できる。

2.1.3 その土地についての理解の促進

a) 伊勢神宮と伊勢市（インタビュー1～3）

音羽氏によると、より若い世代の訪問者のなかには、ここに太陽の女神「天照大御神」がいるということを知らない人々もいる。彼らは伊勢神宮をむしろパワースポットと見なしているが、伊勢神宮はこのことをネガティブには捉えていない。彼らがここで一度みずから何かを感じれば、後に伊勢神宮が信仰について教えることができると考えているからだ（インタビュー1、48分50秒）。

伊勢市観光振興課の谷氏は（インタビュー2）、これまでは、身を霊的に浄め、それによって自分に何か良いことが起こると期待して伊勢神宮に参拝するのはほとんど日本人だけだった、と指摘している。

これまで伊勢神宮を訪れた訪問者のうち外国人は2%であるが、この外国人たちは二つのグループに分かれる。第一のグループは、訪問前に神道について勉強している人々である。これは基本的にはヨーロッパ人で、参拝の際には神社に感銘を受けている。第二のグループは予備知識を持たない観光客で、その多くは中国人かアメリカ人である。彼らは参拝しても、神宮を前にして何をしたらよいか分からない。見るものがあまりない、最奥にあるものは見られない、仏像もない、といったことが聞かれる。祈祷所における撮影禁止も、特に外国のジャーナリストたちには理解してもらえず、たびたび神職たちと言い争いになっている。

b) 熊野那智大社と熊野三山地区（インタビュー4～6）

熊野那智大社の欄宜である伊藤氏は、熊野那智大社と那智の滝に魅力を感じている訪問者には三つのグループがあると説明している。第一のグループは、滝と世界遺産というステイタスのために、ただ観光客としてのみやってくる人びとである（インタビュー4、20分45秒～）。第二のグループは、熊野の神を崇拝する信仰の篤い人々である。第三のグループは、那智の滝を崇拝する人々である。訪問者たちが何らかの気持ちやこの土地への特別な関係を自然に発展させることもよくある。つまり、そうした人々は、まずはただ滝を見に来

るだけなのだが、その後、滝を見て感じた気持ちに完全に心を奪われ、信仰心を篤くするのだ。あるいは、彼らは別の参拝者たちが祈祷しているのを見て、この土地の神に対してみずからを開くようになるのである（22分40秒）。外国人（最も多いのはフランス人）もここへやって来て、何かを感じている。なかには、合気道の創始者である植芝盛平の生まれ故郷が田辺市であるという理由で、当地を訪問する人びともいる。

質問に対して伊藤氏は、この土地の特別さを体験するためのより内容の濃いガイドを考えていると説明している。例えば、関心のある訪問者が神社に宿泊したり、滝壺での祈祷の儀式に参加したりできるかどうか、検討している（38分45秒）。

田辺市熊野ツーリズムビューローの小川氏は、文化遺産や自然や山道や休憩所に責任感をもって対峙し、使ってくれる観光客を望んでいる（インタビュー5、49分0秒～）。そのため、外国からのツアーコンダクターには、現地で土地の意味と歴史についてレクチャーを行っており、このために、田辺市の観光の発展・促進を担う国際プロモーション事業部長ブラッド・トウルによって「熊野古道中辺路オフィシャルガイドブック」が作製された¹⁰⁾。

那智勝浦町の土佐氏は（インタビュー6）、土地をより深く理解してもらうための特別なプログラムやガイドを提供することは考えているか、という質問に対して、そうした参詣ツアーがすでにあると説明した。「那智の滝神秘ウォーク」と呼ばれているものである。原始林は通例、一般公開されていない（15分00～）。しかしこのツアーは参加人数を制限して三月から五月までの期間に開催しており、予約はつねにすぐにいっぱいになる。

以上をまとめると、伊勢においても那智においても、多くの訪問者はそれぞれの神社をパワースポットと感じているが、これまでは那智でのみ、そうした神秘的なものへの関心に目が向けられ、観光サービスとして提供すべきだと考えられており、その一部はすでに実現している（神秘的な滝ツアー）ということが確認できる。

2.1.4 観光プランニングと将来的な戦略

a) 伊勢神宮と伊勢市（インタビュー1～3）

伊勢神宮の音羽氏は、伊勢観光にとっては交通の便が重要だと強調している。「伊勢は東京からとても遠い」というイメージを払拭したい、と述べている。これは、神社が管理・行政サイド（三重県、伊勢市、JR東海および近鉄といった鉄道会社）と共有している戦略である。東京から日帰りでも旅行できるべきで、そうした日帰りプランが作成されなければ、たいていの旅行者は伊勢を通過してしまうだろう、と述べている（インタビュー1、1時間5分40秒）。

さらなる問題は、たいていの旅行者が神社の内宮だけを参拝し、外宮は訪れないということである。旅行者たちはほんの短時間だけ伊勢に滞在し、内宮と歴史地区（おかげ横丁）のみを見学し、そこで買い物をしたり昼食をとったりする。それが今日の観光のお手本となっている。これを変えるためには、伊勢市や交通機関と提携して、外宮も観光に含めてもらえるような新しいサービスが必要である。目下この問題についても話し合っており、最近では、日本航空（JAL）が旅行雑誌と客室内のモニターで伊勢神宮を紹介してくれた。

交通の便のほかに、訪問者がここへきて、見て回り、「感じる」ことがとても重要である。そうすれば、訪問者はより尊敬の念を高め、彼らの振舞いもよくなってゆく。神社は、人々がリーダーとして毎年訪問してくれることを望んでいる。

伊勢神宮はインスタグラムも使用し、季節ごとの宣伝もしている。「あなたがこの季節に来ると、こんな美しい景色が見られます」といった具合である。音羽氏は、結局我々は今日情報化の時代に生きているのだから、今日的な方法やテクノロジーを使って、世界に発信すべきだ、と説明している（1時間14分0秒）。

伊勢市の中村氏は（インタビュー2）、日本語と英語表記の地図や看板を作製中だと述べている。同時に彼はしかし、国際化のしすぎはよくない、とも強調している。さもないと、元々の雰囲気や独自のアイデンティティが失われてしまうからである（37分6秒）。

さらに彼は、伊勢では「式年遷宮」と呼ばれる

二十年ごとの社殿の完全な新設が、市の計画と観光計画全体に影響を与えているとも説明している。社殿の新設前と建設中は、非常に多くの訪問者があるため、市のインフラに通常よりも多く投資される。式年遷宮の儀式が繰り返される場合、短期的に見れば利潤が生じるが、式年遷宮後はたびたび投資が減少している。市の見解からすると、最も重要なのは、より多くの観光客に伊勢を知ってもらい、伊勢を訪れてもらうことである。

同時に中村氏は、伊勢には実際、この有名な神社しか観光対象として提供できるものがなく、それを除けば小さな田舎町であるということ、外国人との付き合いにはまだ慣れていないということ指摘している。将来的な最大の課題は、人材流出と出生減による人口減少の問題である。

b) 熊野那智大社と熊野三山地域（インタビュー4～6）

田辺市は、世界遺産というステイタスを得た一年後の2005年に新しい観光戦略を策定した。その実行のために、すでに田辺市に居住していたカナダ人のブラッド・トゥルを雇用し、独自のプランニングチームを作った（インタビュー5、2分11秒）。自身がアウトドア活動家で熊野古道のファンでもあるトゥル氏は、新しい観光戦略の策定に決定的な貢献をした（13分46秒～）。彼は、仏教、神道、修験道がとくに西洋の観光客にとって魅力的であることや、その土地の食事や文化やもてなしの価値を認識していた。そのため、何か新しいものを作り出す必要はなかった。日本でよく見られるテーマパークや、巨大ホテルチェーンは必要なかったのである。

田辺市の観光戦略の主たる目的は、2005年以来、三つの要素から成り立っている。

第一に、「ブームよりルーツ」というインパクトのあるモットーを掲げた。

第二に、町並み、自然、景観は適切に保護されなければならない、ということが決定された。

第三に、団体旅行の代わりに個人旅行に注力する、ということが決定された。というのも、個人旅行者はただ短時間で通過してゆく団体よりも、熊野地方の魅力を尊重することをよく知っている

からである。また個人旅行者は、歩いたり、自分で事柄を調べたりする意欲も持っている。熊野地域が世界遺産になる以前は、ほとんど外国人は来ていなかった（5分30秒～）。

田辺市は、持続可能な観光という目的のもと、周辺五つの自治体と合併して大きくなった。これにより、自治体レベルで観光とその企画の方針が策定されるようになった。田辺市という自治体の枠を超えた熊野地域全体に共通する観光プランがない理由はここにある。どの土地もよその土地から自分の地域の行政に口出しされたくないと、政治的・役所的サイドは現実的には考えている。

だが、自然空間的な現実と観光客の事実に対する見方はしばしばこれとは異なる。例えば、紀伊山地にめぐらされた古い参詣道は自治体の境界線とはまったく関係なく、複数の県境をまたいでいる（和歌山、奈良、三重）。また、こうした道を歩く観光客も、自治体の境界には関心がない。

道のネットワークにおいては、世界遺産の参詣道という、二か国語による一貫した標識の設置やその保全等が自治体の枠を超えて行われており、これによって、自治体同士の関係も良好になっている（8分～）。

小川氏によると、世界遺産への登録以来、田辺市では宿泊数の記録は全体で少々増加している（+8%）。しかし、西洋からの観光客数はなんと二十倍にも達した。観光戦略が掲げた目的は達成されたとも言える。これには、複数言語によるウェブサイトの開設と、新しいオンライン予約システムが寄与している。ヨーロッパの巡礼道「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」やガイドブック『ロンリー・プラネット』と協力して国外での情宣活動を始めたことにより、日本語の知識がないとヨーロッパからは宿泊等の予約ができないことが明らかになった。こうした不備を解消するために、オンライン決済も可能な包括的オンライン予約システムが構築された。

こうした町の観光戦略についての質問に対して、那智勝浦町の土佐氏は（インタビュー6）、目下、観光全体をプランニングするためのアイデアを集めているところだと説明している。それによると、那智勝浦の魅力はまず第一に、世界遺産

である熊野那智大社と滝で、第二は日本の最高品質と認められている新鮮な生マグロであり、第三は、多くの有名な温泉である（19分30秒～）。

こうした魅力があるにもかかわらず、那智勝浦には将来的な観光の「モデルプラン」がまだ存在していない。しかし九月には、将来決定のための基盤となる全体構想を練り上げ、地域的な観光資源をまとめ、人材育成の遂行能力を高めることを目的として、住民と自治体のステークホルダーが参加するワークショップが予定されている。

以上を踏まえると、観光マネジメントはそれぞれの土地で大きな違いがあると言える。伊勢には、精力的に活動している観光振興課と観光協会があり、伊勢神宮と協力して英語のガイドや情報提供を展開しているが、包括的な戦略があるわけではない。熊野三山では、田辺市が、持続可能な観光マネジメントと明確な目的志向をもって活動する先駆者になっている。同地域では那智勝浦町はそうした歩みをまさに始めたところである。

2.2 考察

神社の意味と位置について（表2のテーマ1参照）は、二人の神職がインタビューで似たようなことを述べている。例えば、標高の高い位置にある、安全な地形、山と森、清らかな流れといったことである。原則として、「神」がいる手つかずの自然のある場所が重要なのだ。これは、東京郊外の神社の神職が以前インタビューで話していたことと一致する⁽¹⁾。つまり、自然崇拜は今なお神道の伝統の一部であり、神社をとりまく自然環境の保護に重要な意味を持っていると言える。

そのため、本インタビューと現地調査においては、景観的な保全状況も考慮に入れた。

伊勢神宮は、境内と鎮守の森に囲まれた外部も含む広大な敷地と、そこに隣接する広大な山林を有する。この森は部分的には自然林で、部分的には自然に近い形で人の手を入れて保護されている。内宮と上記の森はさらに、南側は太平洋にまで至る伊勢志摩国立公園の一部でもある。過去の開墾や乱伐にもかかわらず、これらの森林は現在では持続的かつ安定的に保護されていると言える。

熊野三山の熊野那智大社は古い樹木を含む広大

な神社の敷地に加え、1928年以来天然記念物として保護されている那智原始林も有している。

また、和歌山県の景観保護条例が制定され、参詣道沿いや熊野三山の神社の周辺は世界遺産の一部として保護地区に指定されている(注6を参照)。熊野那智大社と原始林を含む滝は吉野熊野国立公園の一部でもある。

伊勢神宮と熊野那智大社いずれの神社も、幸運なことに、法的制度によって景観的にはとてもよく保全されているが、これは当然のことではない。市街地から外れた地方の神社は、景観的に保護されていないことが多い(注11を参照)。

自然と良好な景観保全は、素晴らしい自然が旅先の魅力に結びついているこうした場所の観光にとっては特に重要である。また、目には見えないが感じることができる神的なものの存在による土地の神聖さにも注目できる。こうした視点は、その土地に合わせた観光コンセプトに導入されるべきだろう。

観光客の行動について(テーマ2参照)は、伊勢でも熊野でも、すべてのインタビュー対象者が良いと判断しており、今日まで改善もされてきている。こうしたポジティブな傾向は、文化遺産観光に活力を与えてくれる結果である。

どのように**その土地の理解を促進**することができるか、という質問については(テーマ3参照)、インタビュー対象者からさまざまな意見を聞くことができたが、そのどれもが明確で詳細な答えというわけではなかった。

興味深いのは、伊勢神宮が、最近の若者が神社の境内と神木を、信仰の場所というよりも、パワースポットとして捉えていることを、明らかに問題視していないことである。こうした寛大さは歓迎されるべきだが、一方で、若い世代にとってこの土地の唯一性を伝えることができるかどうかは分からない。論者はこの質問において、慣習にとらわれないアプローチ方法が聞き出せるものと期待していた。例えば、太陽の女神やその他の神々を感じるための神社の境内や建造物の構成を解説する特別なガイドや、実践も含んだワークショップ、精神修養といったトレーニング等である。

博物館や映像やパンフレットといった、神社の

文化的な意味を伝える従来型のメディアはすでに十分にある。これらにも意味はあるが、たいていは訪問者の知性にしか訴えない。これから必要となるのは、それぞれの訪問者が事前に準備をしたうえで、そうした神聖な土地を心で感じることであり、そうすれば、行動規範に関する外国人訪問者の無理解は、伊勢市の担当者が言うように、次第に解消されてゆくと思われる。

熊野では事情は異なる。ここでは、神社の神職が、その土地の神秘性を感じることができるよう新しいサービスを提供するという提案にはっきりと興味を示していただけではなく、那智原始林への神秘的な滝ツアーによって、すでにこうした方向に進んでいることが明らかになった。

きわめて重要な観点である**観光マネージメントと将来的な戦略について**(テーマ4参照)は、それぞれのケーススタディにおいて、歴史や自然空間的な位置、ステイタスや観光サービスに基づく、明らかな違いがあった。

伊勢では古来より、日本の皇室と密接に結びついた「天照大御神」が祀られており、これによって、この神社と参詣地が明確に日本の国家的シンボルとなっている⁽¹²⁾。これに加えて、伊勢と那智の二人の神職は、伊勢における稲作について指摘していたが、これは実地調査でも確認できた。伊勢神宮の簡素な農家風の建築様式は弥生時代の農家の米蔵と似ている。さらに、伊勢神宮は今日でもなお自前の水田を管理しており、儀式や祝祭や米製品製造のために、神聖な米を栽培している。神道と稲作や四季との密接な関係は、日本全土でも一般的に重要である。

日本人観光客にとって伊勢参りは、何百年にもわたる歴史もあって、たとえ交通の便が悪くても、まったく自然なものである。1970年代と1980年代の一時的な訪問者数の減少は、魅力的な新しい店や飲食店のある歴史的な街並みを作り出すことによって克服された。しかし、そうした観光活動や投資は伊勢市ではなく、同地で有名な和菓子屋「赤福」によるものである。今日では、参拝のあとで多くの人がここに買い物に訪れる。伊勢市は歴史的な景観を作り出すことに反対ではなかったが、当時はまだ共感を呼べるようなアイデアを持って

いなかった。そして今日でも、行政サイドには、伊勢と将来の観光についての包括的なビジョンが欠けているように見える。外国人観光客の割合が1%から2%に上昇したのも、2016年に開催されたG7サミットとの関連で国際メディアが報道したためである。伊勢での観光サービスは限られている。基本的には、著名な神社とそれに付置された博物館を見学できるだけだ。あえて少々挑発的に問うてみよう。日本の皇室にアイデンティティ的な関わりをまったく感じないはずの外国人観光客が、なぜここまでやって来ないといけないのだろうか？誤解を避けるために予め述べておくと、論者は個人的には伊勢神宮の純潔さと簡素なエレガントさ、そして自然に圧倒的な感銘を受けている。また、行政に携わる方々はインタビューに非常に丁寧に対応してくださった。しかしそれでも、上記の問いは問われるべきだろう。というのも、インタビューではこの問いに対して十分な答えが得られなかったからである。伊勢へのインバウンド観光を促す明確な戦略はなく、英語による情報提供やサービスは増えてきているものの、観光のモデルプランはまだ存在していない。

これに対して、田辺市の状況はまったく違う。こちらでは観光のモデルプランがすでに実践として存在し、これには多言語による情報提供システムやオンライン予約システムや、多彩なイベントや予約可能な現地ガイドによる各種サービスも含まれていて、地方経済に直接貢献している。田辺における観光戦略の高いクオリティと絶え間ない進化は、日本の他の観光地にとっても優れたモデルとなりうる。伊勢と熊野三山は、その双方において非常に古い参拝の伝統が見られるが、熊野では、日本人観光客のほかに、新たなターゲット集団として、深い関心をもって和歌山の南端にまで来て神秘的な熊野の山や神社仏閣の景色を見て歩き経験しようという西洋からの個人客に注目している。古くからの神秘性を新たに体験できるようにするという方向性を熊野地域がさらに進めてゆけば、おそらくさらなる成功を収められるだろう。というのも、多くの人々のあいだで、神秘的な体験に対する憧れが強まっているからだ。

こうした意味で、慣習にとらわれない、質の高

い新しいサービスを作り出すことが重要である。これは伊勢にも可能なことである。単なる消費・買い物ツアーや見学ツアーは時代に逆行している。ますます求められているのは、本物の「土地と人」の体験である。つまり、私たちの内面に触れ、豊かにしてくれる唯一の経験である。こうした社会的な傾向の把握は、スピリチュアルな観光の側面にとって有益だろう。

謝辞:

インタビューにご協力くださった方々(表1参照)には大変親切にご対応いただき、貴重な情報を得ることができた。またとくに、皇學館大学の岩崎正彌准教授には、伊勢での研究調査の際に大変なご支援とご助力をいただいた。明治大学の岡本和子准教授には本論文の日本語執筆に際して助言をいただいた。ここに謝意を表する。

参考文献 (References)

- (1) https://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/actions/201603/30kanko_vision_kaigi.html (最終閲覧 2018年8月23日)
- (2) Raj, R. & Griffin, K. (eds), *Religious Tourism and Pilgrimage Management, An International Perspective*, second edition, CAB International, 2015.
- (3) Sonoda, M., *Shinto and the Natural Environment. Shinto in History. Ways of the kami*, J. Breen, Teeuwen, M. . Honolulu, Hawaii, University of Hawai'i Press: 32-46, 2000.
- (4) Ono, R., *Shrine Settings in Japan as Life-cultural Landscape with Diverse Relations to Nature*. *Journal of Landscape Architecture in Asia* 3: 145-150, 2007.
- (5) Watanabe, Y. *Shinto Art: Ise and Izumo Shrines*. New York, John Weatherhill, Inc, 1974.
- (6) UNESCO, *Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range*. <http://whc.unesco.org/en/list/1142/> (最終閲覧 2018年8月28日)

- ⁽⁷⁾ Graphard, A.G., Flying Mountains and Walkers of Emptiness: Towards a Definition of SacredSpaceinJapaneseReligions.University of Chicago, History of Religions 21, pp. 195–221, 1982.
- ⁽⁸⁾ Map base from YMAP (熊野古道紀伊路その1, <https://ymap.co.jp/sp/map/1732>) edited.
- ⁽⁹⁾ 注7を参照。Graphard (1982) beschreibt die Idee und Entstehung solcher physischen Landschaften als Mandalas in seinem Aufsatz.
- ⁽¹⁰⁾ Towle, B., Kumano Kodo Nakahechi: Official Guide Book, Tanabe City, 2017. [11]<https://www.travel.co.jp/guide/article/30272> /(最終閲覧2018年9月6日)
- ⁽¹¹⁾ Poggendorf, L., The landscape of district shrines at the fringe of Tokyo: a study about its present state, change, and conservation (東京近郊における郷社の景観: 現状、変容、保全に関する研究) 東京大学. NII Article ID (NAID) 500000459716, doctoral thesis, 2008.
- ⁽¹²⁾ Eder, M., Die „Reisseele “ in Japan und Korea. Folklore Studies, Vol. 14, pp. 215-244, Nanzan University,1955.